

永青文庫蔵雑記類より (七)

寛延奇談

西田 耕三

『寛延奇談』(7巻2冊)は写本で伝わる。記事は寛保2年(1742)の件が最も古く(後述)、寛保3年(1743)の新嘗祭の触れや江戸町人数の調べなどがこれにつぎ、延享4年(1747)の板倉修理の乱心、刃傷、切腹にかかわる事柄が最も新しい。寛延は延享の後の年号である。『寛延奇談』は有名な日本左衛門の悪事を載せる(巻6)ことでも知られる。

ここでは二つの奇談を紹介しよう。まず、巻1に収められている「奥州会津細田村之百姓義経之御判物所持之事」である。

奥州会津細田村百姓惣平、寛保二年戊暮、御年貢不相濟、公義より關所被仰付候処、右惣平住居候家之棟木に、先祖より代々箱に入、其上を幾重ともなく包、終に披見候事も無之由にて結付有之候。今度切落し、相改候処、左之通書付有之候。

此度北敵へ相渡候為、糧米粟七斗致借用者也。帰参無之候はゞ、時の將軍可預裁断也。

文治四年四月十八日 伊予守義経判

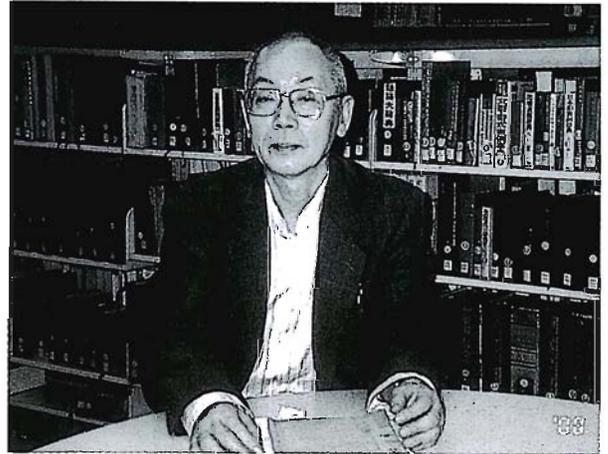
会津細田村

惣平どの

筆者亀井六郎と有之。依之、公義へ相達し、御吟味之上にて惣平へ知行三百石被下置る。

文治4年(1188)は、義経の死の前年。亀井六郎は、兄鈴木三郎とともに義経に最後まで随った家来である。惣平が義経の書付を所持していたために三百石をもらったというのだから、この記事自体は大まじめなものだろうが、たとえば、『西鶴諸国ばなし』の叙述を思いあわせると、いかにもわざとらしい近世的な奇談にみえてくる。すなわち、『西鶴諸国ばなし』序文に

世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。……加賀のしら山に、ゑんまわうの巾着もあり。信濃の寝覚の床に浦島が火うち



筥あり。かまくらに、頼朝のこづかひ帳有。…

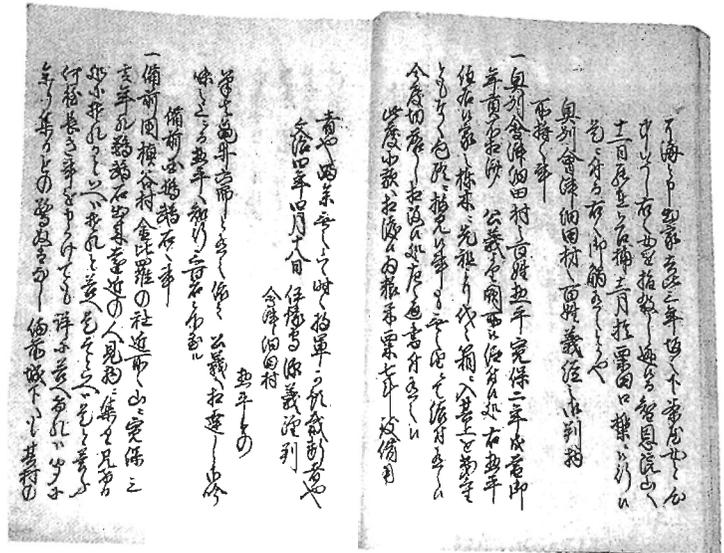
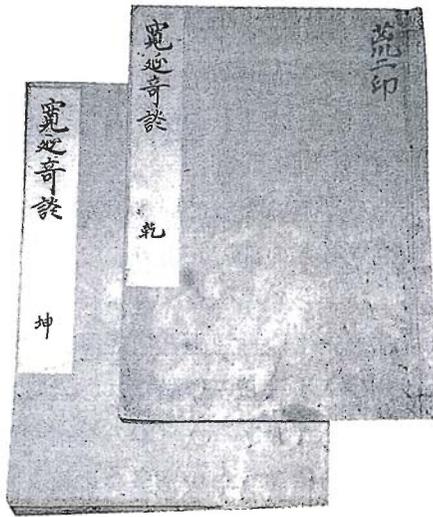
とあり、同じく巻1-6「雲中の腕をし」には、

……よしつねこそ、丸貌がらにして、鼻ひくう、向齒ぬけて、やぶにらみにて、ちゞみかしらにて、横ふとつて、男ぶりは、ひとつもとりへなし。……亀井は、何をさしても、小刀細工がきいた。鈴木、つぎのぶは、棒組にて、一生飛子とびこ買ふて暮す。……

とある。こういう感覚が、随分古い時代のこととなった源平の武将たちのことを、奇談として扱うことになるのである。なお、この借用書の話は小異をともなって、他の資料にもみえるが、省略する。

もう一つは、一休の筆跡に関する記事で、巻2の「仙台中鎗持不計一休の正筆調候附紫野大徳寺添簡之事」である。

延享二丑年春の比、仙台中松原新左衛門と申者之鎗持、不計古き書物見当り候故、直段何程と問候得ば、二十銭計と可申旨申聞候に付、十五文に付け候得ば右之通弘可申よしにて、買取申候。主人新左衛門へ見せ申候処、一休和尚正



筆にも有之哉と申、仙台の大寺へ差出候処、究もいたしがたく、京都紫野大徳寺へ遣し、吟味之処、一休和尚真筆紛無之由、代金九百両折紙添簡共に極り候。依之、右新左衛門へ陸奥守より、刀一腰馬壺正時服十重給り、新左衛門鎗持へ金百両差遣し候よし。

右之書物にいわく

- 一、坊主になるな魚を喰
- 一、地ごくへ行て鬼に負るな
- 一、大食をして暮せよ
- 一、念仏申さずとも遊興をするな
- 一、仏法はうそならし

皆人はよくを捨よとすゝめつゝ

あとでひろふは寺の上人

紫野 こんきやう齋

如是書物なりしと、其比風聞有しを聞て、爰に記すもの也。

「書物」はカキモノと読むのであろう。一休の正筆が当時どれくらいの相場であったのか、私には皆目見当がつかない。しかし、九百両というのは、いくら大徳寺のつけた値だとしても、法外な気がする。ここにも、さきほどと同じ奇談を喜ぶ感覚が働いているように見える。十五文で買った書物を九百両にするという野放図な感覚が話を創り、噂を伝えて、それらを書とめていく。

一休は、この書物に記されている程度のことは平気で言った人である。しかし、それだけではない。近世期における一休ものの盛行がそれに輪をかけ

た。正確に言えば、奇談を喜び、滑稽を楽しみ、畸人を歓迎した近世期の感覚が、一休ものの盛行を支えたのである。また、浮世草子『御前義経記』では、義経はたいへんな好色漢に変貌している。ただ、残念ながら、そのような近世期の嗜好が何に拠るものなのか、私にはまだ明確な見通しが得られない。

(にしだ こうぞう 元文学部教授)

*7回続いた「永青文庫蔵雑記類より」の連載も、今回をもって終了です。長らくご寄稿いただきました西田先生、ありがとうございました。